

No.2421



教育ルネサンス

変わる放課後 5



障害児は「普通の友だち」

宮浦咲空さん(9)は、学童保育で友だちとけんかして泣いていた。知的障害があり言葉が話せない。その様子を見た小学3年生の女の子が緑色

の紙粘土をそっと渡すと咲空さんは一転、笑顔になった。神奈川県横須賀市の久里浜商店街の店舗跡に開設した学童保育「sukasuka kids」では、子どもが障害の有無にかかわらず過ごせる。



他の子どもたちと仲良く遊ぶ麗さん(左から2人目)(14日、神奈川県横須賀市で)

発達障害や知的障害のある子ども10人と障害のない子ども3人の計13人(1〜5年生)が登録する。折り紙を取るのが難しい子には折り紙を手渡し、紙粘土投げに興味を持って

いそうな子には声をかけるなど、あちこちで障害のない子の障害児への自然な配慮がみられる。「互いの考えを察して行動し、言葉なしでも通じ合えている」と、代表の五本木愛さん(44)。

sukasuka kidsは昨年4月、同市内に住む障害児の親たちで作る一般社団法人が設立した。五本木さんの次女麗さん(8)も知的障害がある。幼稚園では、周りの子が自然と手を差し伸べ、遊ぶ関係があった。しかし、小学校では支援学級に入り、障害のない子と過ごす時間はほとんどなくなってしまう。「これでは障害への理解が進まない。せめて放課後、一緒になれる環境

を作りたい」と思い立った。小3の娘が通う藤田有加さん(29)は、「引込み思案だったが、他の子の面倒も見るようになった。障害のある子を特別でなく普通の友だちと考えている」と話す。咲空さんの母のめぐみさん(39)は、「人に歩み寄ることができるようになった」と咲空さんの成長に目を見張る。

厚生労働省は、学童保育への障害児の受け入れを推進する。施設のバリアフリー改修経費を最大100万円補助する事業などもあり、障害児を受け入れる学童保育は2004年の4471か所(全体の30.9%)から、18年の1万4149か所(同55.9%)と約3倍に増えた。専門家を学童保育に雇用する動きもある。

岡山県学童保育連絡協議会は、16年度から学童保育に見

童の身体の様子を観察し、指導員にアドバイスする作業療法士を派遣している。音に敏感な発達障害児には耳あての装着、姿勢を保つ力が弱い子には身体が安定するようエアクッションの上に座らせるなど、障害児が快適に過ごせる方法を伝える。同協議会の糸山智栄会長は「障害児の身体補助の仕方は分からないことも多く、助言は学童保育の環境改善につながっている」と手応えを感じる。子どもたちが障害の有無にかかわらず共に学ぶインクルーシブ教育に詳しい津田塾大学の柴田邦臣准教授(社会学)は「障害のない子が障害者と同じ空間で過ごすことは障害への理解を促す。両者が一緒に過ごす場には、勉強中心の学校よりも学童保育が適している。今後は、専門知識を持つ人材を活用しながら広まってほしい」と指摘している。